

お薦めの一冊

『布川事件・櫻井昌司の獄中日記 土芥寇讎超記 二九年幽閉された青年の心の軌跡』

塚越豊 著 文藝春秋 2,778円(本体)

魂の叫び

会員 青木 和久 (65 期)



「青木君,良かったらこれ読んでみるか?」。事務所で、席を隣り合わせていただいている元最高裁判事の先生から、そう声をかけていただいたのが、本書に触れた最初のきっかけだった。

『布川事件』。恥ずかしながら、再審無罪が認められた著名な冤罪事件という程度の認識は有していたものの、被疑事実の概要すら覚束無い状態であったが、冤罪被害者が、獄中で三年間にわたって書き綴った「獄中日記」。純粋に、「読んでみたい」と思った。

当初、日記の執筆者である櫻井昌司氏(以下「櫻井氏」という)が記載した記述を、記された時系列に従って忠実に再現した内容であるのかと考えて読み始めたが、さにあらず。

櫻井氏の弁護団事務局長も務められた著者である塚越豊会員による、事件の概要や裁判の進展等の説明が丁寧に記載され、それと合わせて、櫻井氏の日記の記述が、整理して引用された形になっており、事件についての詳細な前提知識がなくとも、存分に櫻井氏が綴った獄中日記のエッセンスを理解できる構成になっている。

櫻井氏の日記を読み進めると、「なぜ、やっていないことをやったとして、虚偽の自白をしてしまったのか」「やっていないのであれば、どうしてやっていないと言い通せなかったのか」という疑問に対する答えが、自ずと見えてくる。そこには、人間は目の前に圧倒的な力を持つ(ように見える)権力者と対峙した場合、自分が思っている以上に弱い存在であるという現実がある。捜査官に限らず、我々法曹が関与する「司法」権が、れっきとした国家権力の一種である以上、常にそのことを頭の片隅に置いて行動する必要があるとの自戒を新たにさせられる。

もっとも、櫻井氏の日記は、人間の「弱さ」だけでなく、それ以上に、困難な状況にあっても、挫けずに自らの信念と正義に従って希望を持ち続ける、人間の「強さ」をも示している。日記には、「苦しみは人間に本当の自分自身を考えさせる」「苦しみはだらしのない人間を治療する」というような、逆境においてなお精神の気高さを窺わせるくだりが、随所に見られる。本書のタイトルである『土芥寇讎超記』(どかいこうしゅうちょうき)とは、江戸時代元禄年間に存在した『土芥寇讎記』に基づく著者の造語であるが、日記には、まさに、たとえ国家権力に芥のように軽んじられても、国家権力を単に敵のように見るという「土芥寇讎」の思想を遥かに「超」越する次元に至った、櫻井氏の獄中での研ぎ澄まされた精神に基づく思索の結果が溢れている。

本書は、実に700ページを超える大作であるため、手に取ると、一瞬その分量に圧倒されるが、内容的には、日記をベースにしたものということもあって、非常に読みやすく、読み始めると一気に読んでしまった。薦めて下さった先生に感謝すると共に、皆様にも自信を持ってお薦めできる一冊として、ここに紹介させていただく次第である。

我々は、基本的に、時間という単位を軸に自らの人生を生きている。櫻井氏が奪われた44年という時間は、あまりにも長い。

だが、櫻井氏のこれからの人生が、その奪われた時間に比して、時間以外の単位において凌駕するものであることを、信じてやまない。